



一日一前

校長室通信

第 14 号

平成30年6月14日

6月 — コミュニケーションの効果 —



日大のアメリカンフットボール選手が関学選手に怪我を負わす目的でタックルをした問題は日本中を騒がせましたが、監督の指示によるものだと結論が出て、解決に向かう状況です。私が一番疑問に思うのは、日大の監督が怪我を負わせた選手と一度も話をせず、コミュニケーションを図ろうとしないことです。日大のこの部は監督の下に数名のコーチがいて、監督と部員のやりとりはコーチを介して行い、直接コミュニケーションを図ることはなかったとのこと。これは監督をカリスマ的な存在であることを選手に意識させ、上意下達で士気向上や意思統一を図る指導方法で、一時代前は効果的な指導でしたが、今の時代はこのやり方は徐々に減っているようです。怪我を負わせた選手は、入部後からアメフトが楽しいと思えなくなっていて、彼が持っていた夢や希望が萎んでしまったことが残念です。

今回の件で、3年前に日本ハムファイターズの栗山茂樹 監督の講演に行ったことを思い出しました。異色の監督で、大学に休職届を出し、大学教授の身分のまま、ファイターズの監督を続けています。栗山監督は選手の能力を伸ばすためにはコミュニケーションが何よりも大切で、「言葉より強い武器はない。最高のチームを作るには監督が伝え続けること、選手は夢をあきらめないことが大切です」と話をし、それは大学教授在職中に今の時代に一番必要なことだ感じたとのこと。そのために若手選手と夜中まで1対1でコミュニケーションを図り、一昨年、その結果が実を結び、ファイターズは日本一に輝き、選手の夢が叶いました。

また青山学院大駅伝部 原 晋 監督も、指導の中でコミュニケーションを一番大切にする監督です。最初は強い部ではありませんでしたが、徹底的に選手とコミュニケーションを図り、選手の能力を伸ばすことにより、強いチームに変貌しました。自然体でコミュニケーションを図りながら選手の能力を引き出し、対話から選手のやる気のポイントを見つけ、「ハッピー大作戦」と名付けた作戦で、箱根駅伝3連覇を成し遂げました。選手達は、「たすきを受けた時から次に渡すまでずっと楽しかった」と全員、笑顔だったのが印象的でした。

高校生にも同じことが言えます。部活動において、技術や知識を習得させ勝敗意識させることは必要ですが、顧問とのコミュニケーションを通して、競技や活動の楽しさ、成長する喜び、助け合い、失敗からの学び方を伝えることがより大切なことです。また部活動だけではなく、清掃活動についても同じことで、教師と生徒と一緒に清掃する中で、教室をきれいにするだけの HR と清掃を通してコミュニケーションを図るための HR では生徒と教員の距離感や信頼感が多少違って来るようです。清掃はコミュニケーションを図る手段の一つと捉え、生徒と雑談しながら生徒理解を図ることが大切と考える先生方により、そこで普段感じている疑問や話題について雑談しながら清掃活動をした結果、清掃や学級が楽しいと感じる生徒がいることが分かっています。



さらに教室は授業をするために行く場所ではありますが、授業の中で生徒とコミュニケーションを図ることも重要と意識されれば、さらに生徒の興味・関心が上がり、生徒の能力を伸ばすことができると思います。授業や特別活動等の教育諸活動はコミュニケーションを重要視することにより、良い結果につながる時代です。日大のアメリカンフットボール部も監督と選手がコミュニケーションを図ることから出直すことを願っています。